

国策「ハンセン病隔離」

医師の闘い 現代に

厳しい偏見と差別にさらされたハンセン病患者に戦前から寄り添って治療を続け、国策の「患者隔離」に抵抗した医師で僧侶の小笠原登(1888~1970)。その生き様を描いたドキュメンタリー映画「二人になる」(1時間39分)が完成した。プロデューサーの鶴久森典妙さん(72)＝兵庫県西宮市＝は「現在の新型コロナウイルスでも感染者や家族、医療従事者への偏見や差別が問題になっている。小笠原の生きた時代、生き方に学ぶことは現在にも通じる」と話す。

生き様を映画化

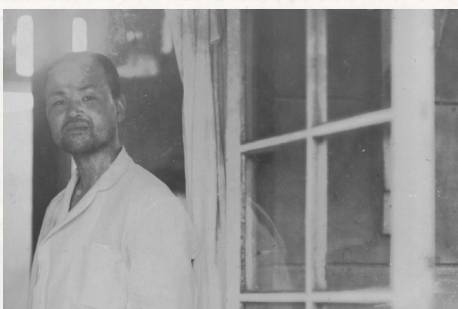
ハンセン病は感染力が弱い
いが、国は96年に「らい予防法」を廃止するまで約90

年間、「強烈な伝染病、不治の病」と誤って患者や家族の人権を無視する強制隔離や断種手術を続けた。

これに対し、真宗大谷派の「円周寺」(愛知県あま市)に生まれ、1915年に京都帝大医科大(現京大医学部)を卒業した小笠原は京大病院で患者に寄り添う治療を実践。「感染力が弱く、治る病気。隔離は不要」とし、療養所への入所を望まない患者のカルテに

は病名を書かなかったり、「皮膚炎」など別の病名を記したりして国策や医学界に一人で抵抗した。戦後、京大病院を退いた後も国立豊橋病院(同県豊橋市)に勤務しながら円周寺で治療を続け、82歳で亡くなった。

2019年6月の熊本地裁判決は、隔離政策で差別を受けた元患者家族に対する国の責任を認めた。この



生前の小笠原登「二人になる」制作実行委員会提供

高橋監督は「ハンセン病差別の実態と、群れず、ぶれずに信じる道を歩んだ医師の存在を伝える映画にしたい」と快諾したという。小笠原の治療を受けた元患者やハンセン病研究家らの証言、日記に基づく再現ドラマなどを19年9月末から撮影。21年3月に女優の竹下景子さんの語りの録音を済ませて完成した。問い合わせは映画製作委員会(072・845・6091)。

【北出昭】